

ミステリ読書案内

2022. 7. 19 発行元

第377号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

仁木悦子の代表作

「日本のクリスティ」とも呼ばれた仁木悦子の代表作を取り上げる。通常ならば『猫は知っていた』から始まる「仁木兄妹シリーズ」を中心にすべきなのだろうが、今回は敢えて別の系列の作品から選んでみた。

私はハードボイルドを評価

仁木悦子は『猫は知っていた』で江戸川乱歩賞を受賞した時点で、女流の「緻密な本格もの」作家という側面で捕らえられる傾向が強かった。「日本のクリスティ」という称号もそこから来ていると思う。でも、私は仁木悦子作品ではハードボイルド傾向のものを評価している。好みの問題だと思っているが…。

私は確かに「名探偵もの」も好きだが、現代のミステリのあり方としては、警察小説か、ハードボイルド傾向の描きの方が時代にあっていると考えている。犯罪小説やノワ

ールという方法もあるけれども、現在の社会や犯罪を描くには、現実の出来事に沿うことが大切だし、客観的な眼で見ていくことが大事だと思っている。事件に関わった当事者の赤裸々な思いをあからさまに綴るよりは、冷静な目で事実だけを描写してもらった方がよい。

そういう意味で、仁木悦子の後期の作品には先見の明があると思っている。感情的になり過ぎず、落ち着いた温かい見守りの雰囲気を感じられる。「謎」と「論理」主体の「本格もの」構成の初期作品よりは、物語を読んだ面白さが加わっている気がする。

NO.3 「みずほ荘殺人事件」

1979年角川文庫。6編収録の短編集。私の手元にある本はいろんな人に薦めた関係でボロボロになってしまった。

表題作『みずほ荘殺人事件』は1960年『宝石』に掲載されたもの。ある年の正月。アパートみずほ荘の二階の一室で住人の淵田弥栄子が扼殺されているのが見つかった。同じアパートに住む東都新報の吉村は回りの人たちの証言を集め、事件の真相を求めて活動を開始する。隣人、被害者の弟、関係者…。時計の針の問題、服装の問題…と積み重ねていくと、やがて思いがけない結末が…。アパートの部屋の配置図なども図で示され、手掛かりも読者の目の前に並べられての「謎解き」が出题されている形式の「本格もの」。

NO.1 「冷えきった街」

1971年講談社。「乱歩賞作家書き下ろしシリーズ」の中の一冊。後期の作品になる。私の手元にある本は立風書房版『仁木悦子長編推理小説全集』。私立探偵の三影潤の一人称で語られるハードボイルド傾向のミステリ。作者による「作品ノート」によれば、出版当時賛否両論が噴出したという。本人としては「意図的にこれまでと全く違った傾向のものを書いたのではない」と話し、「(これまでの)十編の長編の中でいちばん私らしい作品」と言っている。これに私は賛成だ。ひとつの行き着く先として探偵の一人称による描写を選んだことは良い工夫だと思う。「本格謎解き」とも違和感なく合体できる。それは若竹七海の葉村晶シリーズを読んでもそう思う。ハードボイルドを嫌がる必要は全くない。

三影潤が学校経営をしている堅岡清太郎宅を訪問するところから話は始まる。堅岡は尊大な態度で調査の依頼をする。事の起こりは二番目の息子が何者かに襲われて怪我をしたこと。二日ほどして長男がガス中毒で倒れた。元栓が知らない間に開いていたという。そして、今度は六歳になる娘を誘拐するという脅迫状が届いたとのこと。警察に知られないように調査を進めるように言われる。三影は不本意ながらも家族の中の話を集めることからスタートする。基本的には家庭内の人間関係から生まれた事件ということになる。

No.2 「殺人配線図」

1960年桃源社の出版。書下ろし長編推理シリーズの中の一巻。長編第三作に当たる。私は仁木悦子の「本格もの」作家としての良さが最も良く現れた作品だと思っている。本人が書いた「作品ノート」を読んでも、トリックの種類別色分けや、出来事毎のカードを作って、前後関係の配置を考えたり、伏線の張り方を工夫したりしていたようである。緻密な作品作りの上に成り立つ作品。

主人公は東都新報の記者で病気療養中の吉村駿作。ある時、学生時代の後輩の塩入哲夫と出会う。ふとした話の流れで哲夫のいとこの女性の話になる。その女性の父親が大きな自宅の建物の三階から墜落死した件をきっかけにノイローゼに陥っているという。自殺なのか、事故なのか、はたまた…ということで、結論が出ていない経過を聞く。吉村はその建物に行って……。建物の図が出てきて、それから後半にラジオの配線図が出てくる。当時の科学的な話、電気、理系絡みの話になって、コンデンサーなどの説明も詳しい。最後の方になると、事件の背後に隠されていたものも少しずつ明らかになっていって…。すっきりした結論。